

第6回 「日本語大賞」

テーマ

^{いま} ^{つた} ^{ことば}
「今、伝えたい言葉」



一般の部 文部科学大臣賞 受賞作品 「お互い様」のお陰様で

大阪府

市川 睦美

「お互い様」のお陰様で

大阪府

市川 睦美（いちかわ・むつみ）

二年前の夏、夫と北海道を旅行した。新千歳空港から札幌へ向かう電車に乗ると、車内は込み合っていて、通路まで人でいっぱいだった。

私達の近くには、お父さん、お母さん、お兄ちゃん、赤ちゃんの四人家族が乗っていた。その赤ちゃんがかわいらしくて、思わず顔をほころばせながら見ていた。やがて家族が降りる駅が近付いて、お父さんとお母さんが荷物をまとめ始めた頃、お兄ちゃんが唐突に言った。

「おしっこしたい。」

顔を強ばらせたお母さん。「我慢して。」「がまんできない、ここでしていい?」「だめ!」そんなやりとりが終わるか終わらないかのうちに、お兄ちゃんの足元には水溜りができてしまった。お父さんとお母さんの顔が凍りついた。

それからお母さんは、急いで赤ちゃん用のおしりふきを何枚か重ねて床を拭き始めた。しかし、もともと水分がたつぷり含まれているおしりふきでは埒があかない。電車はどんどん減速していく。周りにはたくさんの人目もある。お父さんとお母さんの焦りが、手に取るように伝わってきた。

私はとつさにキャリーバッグに手を突っ込んで、乾いたタオルを引っ張り出した。お父さんに渡すと、戸惑いながらも受け取ってくれた。そのタオルで拭いて、なんとか水たまりを解消できた。間に合った。程なく電車は駅に停車し、家族は降りて行った。お父さんとお母さんが何度も「すみません。」と頭を下げながら。

たまたま旅行中でタオルを持っていただけのこと。申し訳なさそうにする家族に、どんな言葉を返していいか分からなかった。あの時、私は妊娠七か月だった。

やがて子どもが生まれて、子育て支援施設に遊びに行くようになった。ある日、遊んだ帰り際に、ザーザーと雨が降ってきてしまった。なんの雨具も用意してこなかった私は、窓から雨を見ながら途方に暮れた。

すると、近所に住むというママさんが、走って家に帰り、私のために傘とカップを持って戻ってきてくれた。「いいの、いいの、たまたま家が近かったただだから。」と息を切らして。そのカップをベビーカーにかけて子どもを乗せ、私は傘を差して、無事に家まで帰ることができた。

こどもを連れて実家に帰省した帰りのある日。名古屋駅で地下鉄を降りて、新幹線に乗り換えようとした私達の目の前に、大きな階段が立ちはだかった。ぐるっと周りを見ても、

エスカレーターもエレベーターもない。こんな大きなターミナル駅なのに……。きつとどこか探せばエレベーターはあるだろうけど、遠回りして新幹線に乗り遅れたら嫌だなあ。よし、階段を上がろう。

大きな荷物を持っていながら、その上、子どもを乗せたベビーカーを持ちあげようとした時、「手伝います。」と声をかけてくれた女性がいた。お言葉に甘え、女性には荷物を持っていただけで一緒に階段を上がった。女性は「私も子育ての時は、周りの人にいっぱい助けてもらったんです。」と言って去っていった。

外出先でこどもと一緒に弁当を食べようとしたある日。お弁当のバッグを開けてみると、箸とスプーンがない。しまった、忘れてきた……。代わりになる物もないので、近くのコンビニまで買いに行こうとした。お弁当を目の前にして「おあずけ」を食らったこどもはぐずり始める。すると、近くのママさんが声をかけてくれて、余分に持っていた割り箸をくださった。「お互い様よ」という言葉とともに。

ピンときた。お互い様。なんて素晴らしい言葉なんだろう。なんの利欲も計算もなく、助け合おうとする者の間にある言葉。しかもそれは恩返しを要求するのではなくて、むしろ相手の感じる申し訳なさをも相殺してくれるような。そんな優しい言葉を伝えてもらった。

振り返れば、今まで私を助けてくれたのは「お互い様」を実行してくれる人達ではなかっただろうか。雨の日に走って傘とカッパを持ってきてくれたママさんも。名古屋駅で荷物を持ってくれた女性も。

私は、どちらかという人に頼ることが苦手だ。ゆえに、努力したり工夫したりして、自力で問題解決を図ることが多い。その積み重ねは結果として、人に頼ることは良くないという価値観につながっていると思う。

外で雨に降られても走って帰ればいい。大きな荷物を持っていても、がんばって階段を上げればいい。そんなことは苦ではない。箸なんかすぐにコンビニで手に入る。もしも、私だけならば。

でも、こどもがいたらそうはいかない。幼い子どもを雨に濡らして帰ったら風邪をひくかも知れない。大きな荷物とベビーカーを持って階段を上がるのは大変だ。こどもに手掴みでお弁当を食べさせるわけにもいかず、ぐずった子どもを連れてコンビニへ行くのも煩わしい。まして、電車の中でおしっこを漏らされてしまったら……。

そうだ。あの時、北海道で。私が本当に返したかった言葉は、
「いいえ、お互い様ですから。」

「すみません。」と頭を下げながら電車を降りた、あのお父さんとお母さんに。今となってはもう伝えられないけれど……。

ならばその分、これからは誰かに伝えられるだろうか。伝えよう。伝えたい。お互い様。

困った時に手を差し伸べてくれる人達。困った時ではなくても、育児の喜びや苦勞を共有、共感してくれるママさん達。見えない形で、どれだけ助けられていることか。

お互い様。そのひとつひとつは素朴で純粹で地味だ。何の奇跡でもないし、特別な感動物語でもない。きつと、ごく日常にありふれている。でもだからこそ実は、私達の毎日はずっと「お互い様」のお陰様で成り立っているのではないだろうか。

ひとりでがんばるだけではなくて、人とつながって共に在るといふ生き方。こどもは、その架け橋になってくれたのかも知れない。

わが子はまもなく二歳を迎えようとしている。これから、ますますわんぱくになっていくだろう。

赤ちゃん時代を卒業したこども達は、無邪気に楽しく一緒に遊ぶけれど、その一方で、おもちゃを取り合ったり、順番を守れなかったり、押したり叩いたりしてしまうこともある。いろんなことが起こるだろう。謝るべきことは謝り、許すべきことは許す。友達と仲良く共に在るために、こども達にも伝えたい。お互い様。

そして、もうひとつ。これからは優しい人達の「お互い様」に出会った時、「すみません」ではなくて、「ありがとう」を返したい。